

イネ^{いな}稻こうじ病（病原菌：*Villosiclava virens*）

○ 被害と発生生態

糸状菌による病気で、イネの籾に発生する。出穂7～10日後頃（乳熟期頃）より外穎の隙間から緑黄色の小さな肉塊状の突起が現れ、しだいに大きくなって籾を包むようになり、成熟すると暗緑色となる。この病粒が収穫の際に土壌に落下し、病粒中の多量の厚壁孢子が翌年の伝染源となる。イネが移植されると厚壁孢子は発芽して菌糸がイネの根や葉鞘から侵入し、イネの植物体内を通じ花器に達し、花器全体を菌糸が取り巻き、病粒を生じると考えられている。

幼穂分化期～出穂期に降雨が多く、気温が低い年に発生が多い。病穂では死米や乳白米など品質低下が認められ、汚染籾が玄米に混入すると規格外になる。

なお、本菌は発酵食品等に用いられるコウジカビとは別種である。

○ 防除方法

（ア）耕種・物理的防除

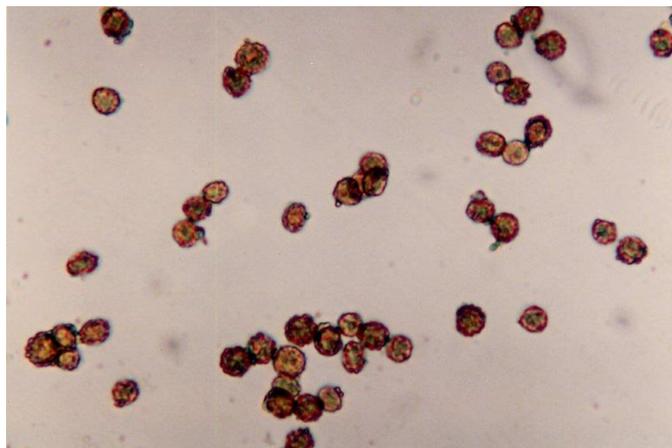
- ・病穂は、早めに取り除く。
- ・品種および出穂の早晩で発生差が認められる。出穂が早いと発生が少なくなるため、発生の多いほ場では早植えや出穂期の早い品種の栽培を行う。
- ・施肥基準を守り、窒素の多施用を避ける。特に肥料が遅効きにならないように追肥に注意する。

（イ）薬剤防除

- ・登録薬剤を粉剤・液剤は出穂期の21～10日前、粒剤は出穂期の21～14日前頃に散布する（散布適期が短いので注意する）。



発病穂の緑黄色および暗緑色の病粒



厚壁孢子の顕微鏡写真